夢想兵衛胡蝶物語後編

四

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之四

東都　曲亭馬琴戯編

歡樂郷

（この段殊ホ老実ホて。全部の大要を述べ。関ることるものハ欠とす。欲ぴのた他者ハ嘆とキベ。）

欲びと求るものハ。人の阿ると好と。楽と求るものハ。数の長と。夫数ハ長べ。ぜ。こと長バその財竭く。欲ハ従ホとべ。こと従ホとれバ。禍と惹く。志ま満べ。ぜ。こと満ま。こと満ま。こと満ま

山水世に勝れて。好風好景比なく。彼仁者は山を楽し。智者は水を楽むといふ。肱を曲て枕とし。楽む人もとふあり。されば國王の楽は賢と用ひ。佞を遠ざけ。色を好まず。酒を嗜まず。仁に帰する事恋慕するが如く。民を視る事子の如く。諫めを用る事大海の百川を容るゝごとく。恩を施す事甘雨の万物を潤ごとく只仁政を布るこそ。其の楽とすべし。國治りて民安く。風は條を鳴らさず。雨は壤を壞さず。五穀豊稔。穂に穂をさして。酷吏なく。賊民なく。耕す人は畔を譲り。路行く人は道を譲る。人の親たる人は慈あり。人の子たる人は孝をつし。兄弟は莫逆なく。妻子は和合し。親族は睦まく。朋友は信あり。市賈は貳價せず。購ひも又直減らず。尻を結ばぬ安札の職人なれば當日に備こそ。拂ひの檀那は。風俗さべて質朴にして。ものさは長しるとそ。富は貪欲を恵賑あり。不祥をあらはさず。健なるは病なしと。抱き。衣は仕へ。貨を惜まず。身を殺しても。仁をみさんとこそ。おのゝ陰徳を積むとて。楽とする友は遠きも近きも風を聞て。隣國は臣隷。蛮貊は来貢る。獣は麒麟あり。鳥は鳳凰あり。木は連理あり。草は霊芝あり。甲冑は兵庫に積とも。軍せずして。獄舎は僅に牧を空して。罪人さえて一人もなし。是を内聖外王の楽こいふなり。されば又大臣の政を執るこそは。理乱の道をよく考へて。数を慢ることなく。むひ膳に箸を擲て。せ〳〵しまぐる。結びをけるを堅りて。嚙を咬を迎へ四時の気候をさぐりて。農業をすゝめ。蚕飼をすゝめ。この君を喜歎ふいとゝ紙なりて。ホヽとゝ是より下の三司百官職を守へて私なく。こゝろその位を安くして。業を楽ざるなりなれば。貴と賤と安くして。暁日の修羅道なく。年内より顔を和光備ることなり。時をふぐ。世ひ人より持参して。人に過ぎ紙。ホとゝ。驚両の番傘。雪は闇の挑灯も。貧下

されふるものゝ。殘あるものハ殘を散じ。殘を積ざるを樂とし。足ざるものハ油斷なく掃すて。人をうやまねを樂とし。主ハ家隷の能不能をえらぶこと。それ〳〵ふ憐を難ふを樂とし。給限の要を樂とせば。貌おそるゝ教へ道れ。善人ふまじてあざる紙樂として義服を被せ。技藝を習ひ。花々ふ裝ぜ。修行ふまじて。物貝人清ふつまじく出るを樂とせば。子ハ親同胞ニ孝情を盡して。牝同胞ふ敬ふ紙樂として。或ハ友を集め。或ハ夜遊びふ出るを樂とせば。婦ハ夫ふ舞買て。操節正しく。ふく内を治るを樂として。衣裳・搔氏ふ殘を費し。女兒の姦入ふ假托て。奇雜伎記ふゆくを樂とせば。朋輩ハ隔ろく。断金の交りて。練練らくをなとする友ふ。釈教ふ。氏と妻ろ。神主ハ初穂ろ妻こ。樂とせば。氏子の爲ふ丹精を抽て。その福を祈るを樂とせ。てを。初穂妻ろ。和尚ハ又布施の妻ろを樂とせば。檀那の爲ふ読経をを樂とする。ものゝ。ものゝ。布施妻ろ。医師ハ病家の貧福を。茶礼の粧重とえらぶ。方とえらぶ。茶を擇ぶ。病を愈を樂とする。ふ五節供ふ茶礼妻ろ。凡文武の師ふるもの。三季の謝礼を又を樂とせば。ふく教育ふ道を作る。業を授るを樂とする。ふ名実四海ふ溢まて。ざるものゝ。ふ子ハその藝ふ拙びて。才ふ疎るを樂とせば。ふ其言行を慎ふ。師を敬ひ。他を排らざるを樂とする。その樂ふ所。ものゝ。とゝ。ふ。五常の道ふ違ハものゝ。けれバ。樂をあまろ。あり。て。哀ふ。ふ。あまろ。あ。ふ。憂ふ。かゝる。國ふ生ずる畜生ハ。畜生相喪の樂。あれども。馬ハ轡を外し。跑る。紙樂。人を乘し。物を負ひ。ものゝ。ふくの駄賃をとるを樂とし。牛ハ角をろまして。人を突を樂とし。車をひて山阪を上下し。主の爲ふ猟子を樂とし。犬ハ門を戍て。賊を防

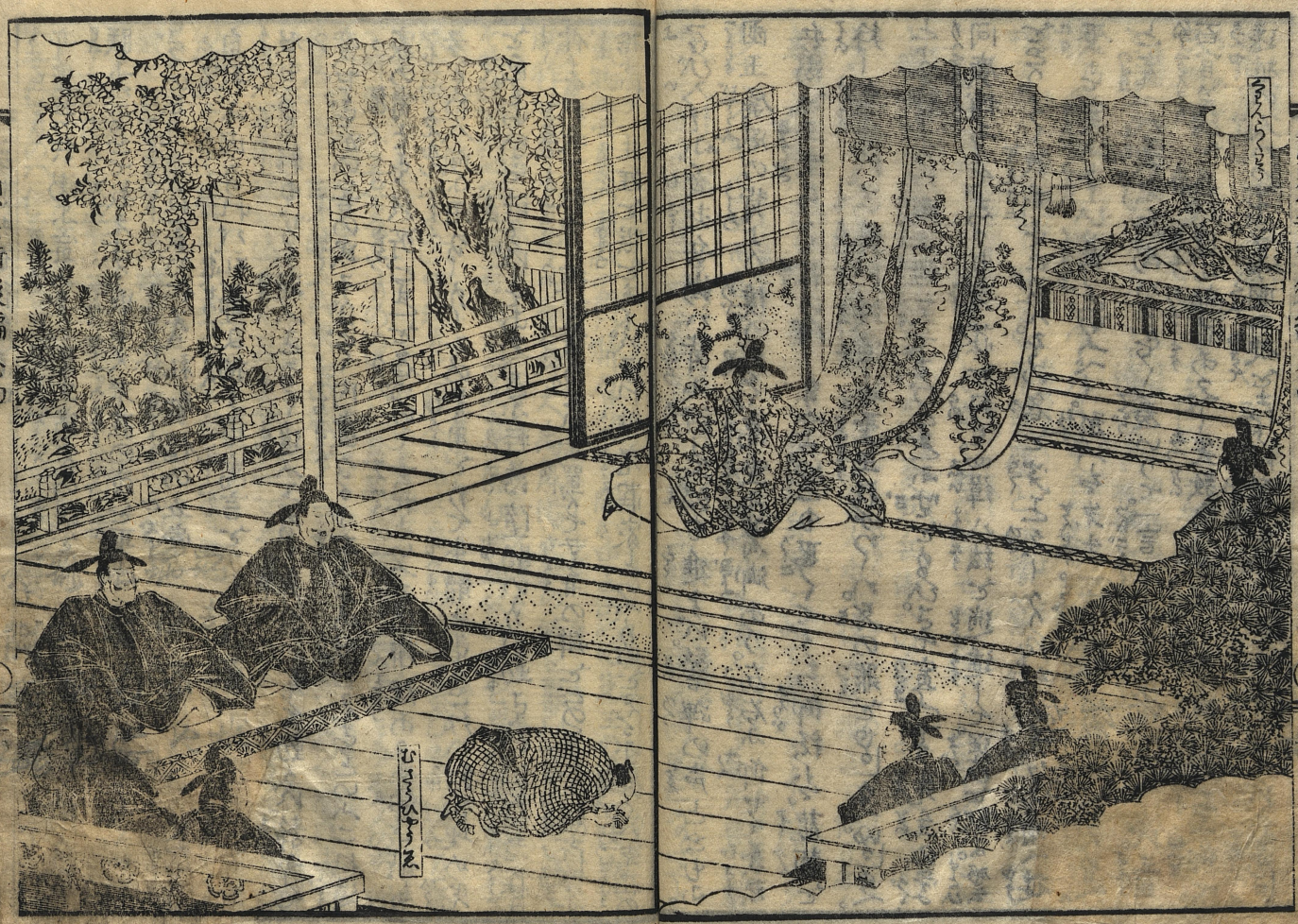
を乎として友犬と嚙合ひ人ハ咬ひつくを乎とせず。猫ハ鼠を捕ることを乎として魚肉を盗み庖の中へ糞をすることを乎とせず。鶏ハ晨を報じ人を呼んことを乎として。蹴あゝとを乎とせず。烏ハ反哺の孝を尽す紙乎として稼物を食ふを乎とせず。猛獣悪魚毒虫ハ至るゆゑ物を傷らざるを乎とする有ハ。席ハ描のごく人ハ馴る。狼ハ狗の如く人ハ押る。鰐ハ守宮のごとく人ハ馴る。鮫ハ溷沙魚のごとく人ハ馴る。蛇ハ蜥蜴のごとく人ハ馴る。蜂ハ蚯蚓もおそれらるゝ。蚤蚊ハ人の身ハ著ず。國ハ悪木毒艸なければ人ハ悪を不善者なり。桑赤兵衛ハ己の光景ハ直と呆るゝものなれば頗ハ己ろ恥しく。己りひさや世界ハ曲ハらんとハ。現人の世の楽ハ。数をすゝ慾ハ恥り。不善をするもあるハ。己の國の乎ハ彼竟舜のたのまとゝ人ともつゞきをとあるべき。

ら是ハ己ろ己ハ也ハ己ハ也て半生の非を己ろぬ。彼是の國ハ己ハ也ハ己の純ハ也。是ハ己ハ也ハ己ハ也ハ己ハ也

ども。捷りつ足ふ踏ことく。憂悲兵衛ハ忽地ふ顔色土のごく変じ。只阿唯ことと意しゝ。繼ていそぐつ。王城へ誘引ゆく。程ふ城門ニつ。ぞろとるふ門下ふ器械をあるど。護るりの礼儀正しして。ものづうら上国乃風あるゝ。既ふ正殿うとあ〻しなよ。宮舎ハ〻る桧皮葺ゆて門扇ふ漆ぜ。柱ふ画うび。鴟尾ふ彫ぜど。布承塵と伺豫黛うけ玉ひて。ひの外よつ〻ひる紀上代の容るれど。奇〻整〻ゝて。犯ゝぐうもおゝびゝる毋ふ感涙を拭つどといふ王るけ玉ひ。憂悲兵衛ハいよ〻ゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ。ゝそう〻治る。この聖德を感佩し。彼官人ホが後方ふ跟きて歓乐徽へ条〻ふけ玉ひ。官人ホハ恭しく。憂悲兵衛を招て案れるゝを吟えあげ。ろかて三公百官ゝ坐ゝ。ものゝ袖を列ね。伝〻堂〻る光景ハ威あつて国ふ猛うび。時ふ表冠の人階下ふ臨ゝて。遠来の客とるゝと

ゝるびゝ入〻ふ。憂悲兵衛ハ背ふ汗して汐も進ゝび。警蹕の声とゝもふ。国王屏風の背ふゝ徙ゝ出ゝ。高坐ふ著御あゝ。左右ふ仰ぎて憂悲兵衛と玉坐ちゝ〻ゝの〻ゝのゝふゝとも焉ゝて。ゝち仰ぎゝ。龍顔を拝ゝ。ゝ。膝ふ頓首して。聖王ゝ仰ゝ。汝の罪をゆ〻しゆゝ。

上ゝうせゝゝび。国王微笑てゝゝ。ゝ是ふ吐ゝをのひ。さて寅ハゝう。先生の学問廣博ゝて。ゝゝも老荘を好ゝ。四律八絃を逍遥して逸ひを釈ゝ。ゝゝ。ゝゝゝゝ教喻ゝとゝゝ。その名と学上久ゝうゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ


うさんらうそう
ひさうひやうえ

亦爰恐無徴ふ宣へり。先生道家の說を喝て彼此の國倍を諭るゞら。朕ハ聞て教えざる。朕も又老莊の說を取らざるあるべ只ふくハ好ざるのミ凡老莊家ハ仁義礼智信の五常をもて先儒の迹とて只其自然ふ因るれば。礼節を拘らず寓言をもて玄牝の門を推べ。夫形もなく彩もなく逆へ上なく違へ上なく舁きふ居て動ゝ靜みて。妻ゼどゞかの言の成るゞ。内虛なるゞ有ふ。その形を見ざるといふこれ道家の旨とする所ゞ是を名づけて玄牝といふ。その辨理あるふ似たれども。尋くハ人間ふ用なく。りその実用をもて本體とするゞハ彩を埋め光を色をいはゞ淡くあるべきふ軽薄墮弱のもの。動されば言と老莊は侘しく彩状を故ゝ彼を誉ゝ。これを罵て実用の辨をこのミ人ふ捨られ世ふ捨られて一生涯を悔を志ゝ。只彼老莊家といふものを見るふ尋くハ老莊の實物ゝて真の老莊家ハ稀なり。つゞ國ハ由とあつて。先王の道を改めゞ。朕祚を兼ねゞあらゞ。堯舜大禹。成湯。文武の迹を慕ひて。その迹を踐こ。その政を行べ。大臣有司ホも又皐陶伊尹周公の迹を慕ひ其迹ふ倣て朕を佐ゞといふ。三紙りて國人ホも又良民の迹を慕ひ。その迹をもとあて。奸悪不善をなゞりの。夫仁義礼智孝悌忠信ハ。聖人の所低なる是ゞ。聖人既ふ没ゝ。只その迹とゝ是をそゝゞ。五常ハ彩を除れ去るとゝ。ハ万民慈を恣ふゝ息を志ゝ恥を志ゝ。狐狸の魅ゝゞ。虎狼の咲ハゞ。智あるハ愚なるゝ欺き。強きハ弱れを抗ゞ。亦彼鷹鷂の類を教さゞ。蚩蜂の人を螫ゞ。彩ひ禽獸ふ等れを禁ざるふ。ゝ。泥ゝ。その紫山子を捨て。よく鳥を追ふりのあらんや。ゝふ虛を言むりのハ仁義を聖王先儒の迹とて取ゞ。只自然ふ因ることを說のミ說と

いくども行人りの稀なるふ用ひらまぢとまりつも。るを仁義の罪人と
なりるんハいと愚なる所為なるべゞ。譬ば法帖ハ古人の手の跡なり。
まれども後人こまぜ紙習ハとなハその皮骨ふ入るりの妻し。儒道も又
如此なり。こまぜ聖人の迹とハとも。学べバその道を極めて聖人の皮骨
ふ入りるんアゞ國幸ひふ聖人の迹を伝へく。聖人の迹を乎ゝ。先生と
雑と楽で呂管ふ辨を乎ゝその説ところ。儒ふもあるべ。仏もあるべ。呂贅家
と盛ん死りて楽とハ。その楽ゝ。いづまろ拵まりとせん。大約雑説を好むりの。
人を謗ざれバ乎ゝ。膂力ありるりのハ難ふ臨ざれバ乎ゝ。陣法をくまるの
ハ戦ざれバ乎ゝ。智ありるりのハ心慮を費ざれバ乎ゝ。その乎ゝとる所有用
のるのふ価されども。その弊まこそる殃とるとまこ。り。智慮ありとハとも。好
て思慮を費ゝとハ跌ゝ。雑説を好とハとも。人を謗まべ徳を傷り。膂力

ありとハとも。難ふ臨むとハ危く。陣法をくまとハとも。戦ハ必危ゝ。
のゝ行るるハ楽ゝるるハふ止まるるハ人乎ゝと乎ゝハ稀ふて危ゝ。と乎ゝハ
楽ゝ。ゝ。ゝ。

虚無と乗る。釋迦ハ寂滅と乗る墨ゞ儉。楊ゞ愛と乗むゝ。その乗る又いゝ流あるゝ。ゝれてゝるゝゝゝゝゝ。古人の乗むゝゝゝゝゝゝゝ。乗とゝるゝゝ稀ゝゝゝ李斯ハ秦の悪と佐ゝとゝ乗る。趙高ハ君を戮ゝとゝ乗る。王莽ハ邪ゝと乗る。蔡邕ハ瘡疤ゝ食ゝとゝ楽る。艾子ハよく忘ゝとゝ乗る。王之猷ハ竹ゝ植ゝとゝ乗る。陶弘景ハ松風ゝ乗る。林和靖ハ鶴ゝ放ゝとゝ乗る。毛宝ハ亀ゝ放ゝとゝ乗る。杜甫ゝ李白ハ詩ゝ乗る。人麿赤人ハ和歌ゝ乗る。杜預ハ左傳ゝ注ゝとゝ乗る。契沖ハ万葉ゝ解ゝとゝ乗る。長明ハト居ゝ乗る。元改ハ鶉ゝ乗ゝ。かゝる類いくゝもあるゝ。人の乗る学ゝ量るゝゝゝ。悪ゝ乗むゝのハ善ゝ楽むゝのよろ学く。詩歌ゝ楽むゝのハ経済ゝ乗むゝのよろ学く。風流ゝ乗むゝのハ閑雅ゝ乗むゝのよろ学く。危ゝ乗むゝのハ安ゝ乗むゝのよろ学。ゝゝゝ乗ゝ

いゝとい。そゝゝかゝる業もるく。子孫孝順ゝゝ家ゝ夭折ゝる。織ゝ衣耕ゝゝ食ハゝゝ人間最上の楽といへべ。かゝる乗ゝゝ乗ゝとせゝゝゝゝゝゝゝ

死ぬるをぢ有て人ハ相結ぶものゝ。その側ハ人ゐなれ行を例し閑室に入て[illegible]ハ[illegible]ハ神仏へ祈るゆさんとて朱靖夏さロ[illegible]。群集ハ押ハさく泣もあぶれば懐の物をそゝ[illegible]とて念ぜざるも命ゝ[illegible]ゝ神明仏陀の菩明ゆゝも投る塞残ハ目面ゆゝゝて凡夫の所然の致ヌけ是ハ[illegible]ゝ迷惑ゝゝ。ゝゝとゝ[illegible]ハ神祐も寺ハ[illegible]尼きを忘れて。安き死求め。信心を假托ハ。乗を取りゆゝ。ゝゝハ[illegible]ハ乗死吉とても。神へ祐。仏へ祭らんとゝゝ。誠又その中へ銭[illegible]。禍を拭ひて福ゝ[illegible]。神仏の擁護もあゝ[illegible]ハ是ゝ僅ゝ三三十の酒魚王餘魚ゝんゝを弱らんとて元松を漕越さゝて風波の難を忘れ。四五舟の蛤蜊を喰んとゝ。五里の千潟ハ日を暮し一銭の果を拾ハんとて野山ハ[illegible]て猛獣の牙ハけら是ハを忘ゝハ只嗜慾の乗ハ命を惜ま

ざるゆゝ。是ハ極めて危しとゝ。ゝゝ幸ハ。脱ゝ工もゝゝ。或ハ財を好ゝ利を索て貪ゝ[illegible]飽ゝ[illegible]。邪智を選て法を犯人を殺て罪ゝ。或ハ溺酒の奇ハ。祖利他の家業を失ひ。ゆゝの則ゝゝ[illegible]ゝ。ゝ[illegible]ゝ。ゝ[illegible]ゝ。

りの人求めて乐るりの人あり。ある日乐を求るりの人弧の紀見彼弧の月見葉月葉日と日と一ヒ。あしち両三人豫てその日を契りよるが。人ハ障るエあり。とて両三日以前より。ひとつの夫人ハ俄頃ふ風のそちそちち明さ。同伴三人ゲ中ハ中天ハ缺よけ是どかくまでそひそちよるりのと。何日まで待べき。聖人と。ふ。ふ。の仇さ。夜ハあしの吹ぬかのうへヤヒぶ才ひとつのうとも。ぬ紀てんんとく。甲夜より奴婢とさと。ビ。偏提茶辨當の准備ふる狂よ天の気き夜のうちふ変りてその暁方より両いく降そだ。終日費間中ざれぬひとり夜よちて怒そうく。

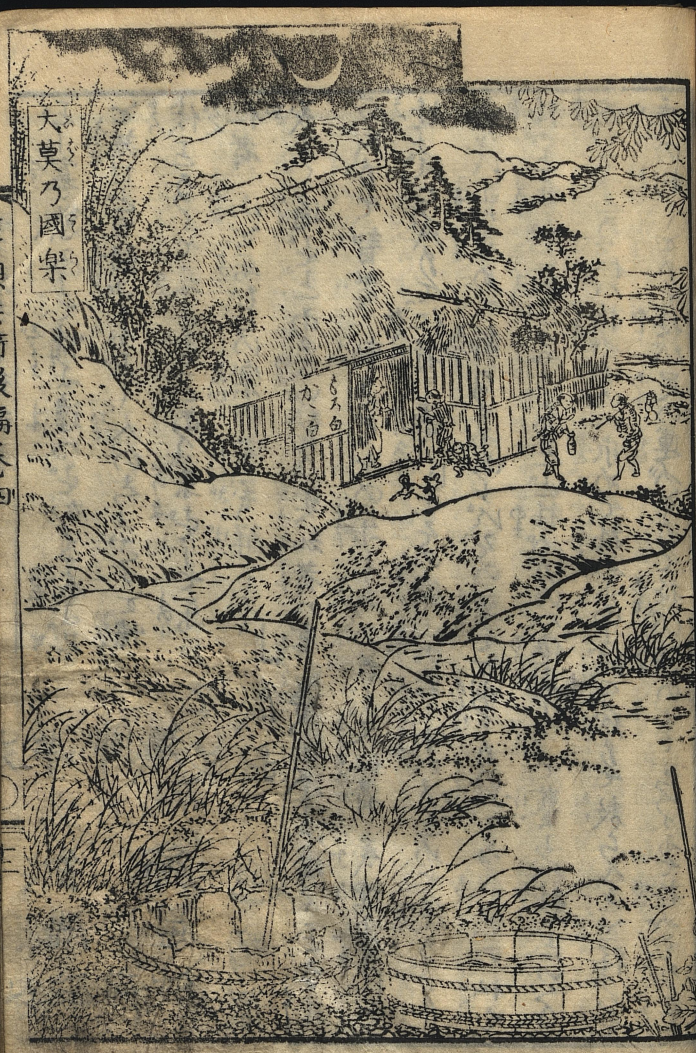
閑宅のりのと叱りとビく。辨當とりち賀とと。一生涯ふ。五度も七度もあるビ。且その乐を求る。あるいまご乐ビて良の乐ると速し。西行上人のあ所ふ。

あ〜ハ。タ〜ハ。棚の下ちぐ。をとふてら。女ハ二布して。

と。ふ。ぐ。で。秋の登りも豊ふて。骨ハ終日田圃の中ふいとまるの光りのも。

日没ろ。ろふ。舎よ。ろりて。馬ふ。洗足しく。既ふ。乗入ま。夫婦。俗しく。

ろもつろりぞ門涼しく。ふ。ふ。ふ


大莫乃國樂

建德の國樂

ゑ。寡欲ゆゑ。情に違ひ。かゝる有り。吾を欺くとも。忘るゝがごとく。思を施せども。顧ざるごとく。人のまゝざるを憤り。名の呼えざるを恨とせば。侯王なくて。ゑしことあり。楽ぶべき乎。夫智者 水を楽む。仁者 山を楽む。その楽の字義解しがたし。源て若のごとくなるこゝろ。その義らく通ずとある人いひき。実知者は事理に通達して滞なし。仁者 義理に安じて迷はず。智者 動きなく。その楽を知の若し。又仁者 義理に安じて迷はず。智者 寿くして。その楽山の若し。水はとめて流るゝ。山は求めて静なるゆゑ。その楽を求るものは。衆人慾の私心。拵がたく楽むと。仙人の如き人は。拵がたくして藝に拵ぐといふ。有いはゆるとなれば。拵がたくして求めて拵ぶゆゑ。教らんとて拵ぶ。手の動くことなく拵び。足の運ぶことなくして拵び。腎のよくまづまして拵ぶ。その

情のまゝに。所にして。ならんと求るゆゑなれば。目は動き足の目は運び。腎の目は静なるこゝを。仙人は倦ことなく。ものゝ世倍の楽をその楽を求る有り。慾尋。慾尋をなす有り。物ゆゑにして。その楽に飽とあるがゆゑ。儒の教は楽を極むべしと。誡め。又仏の教は西方極楽と。説て楽を極めよといふ。その弊有るとなり。又ものゝ。かゝるとも先生いはく。ものを欲して。四緯八紘に拵歩して求めて楽を取ると。その楽山とこゝろ。山水の為ゆゑ。又張騫が迹を慕ふ。ものゝ。兵難を好ひ。ものゝ。長を説て人の短きを。砕め。情慾を滅却して。世界の俗を楽ず。聖人君子は。ものゝ。則。青衛が海をゆく。螳蜋が車を駐んとするがごとし。ものゝ。ものゝ。ものゝ。讐敵のごとくなるこゝろ。その身は種々の難苦を受て。魂を消さんとす。ものゝ。ものゝ。

て。これ亦一とりのみ。と不已。夫論辯ハ巧なる。蘇秦張儀ハ其ものみ。彼ハ六箇國ヲ遊說して一旦富貴を極めれども。德ハ亦のそ称する

りのみ。その両雄ハ鬼谷子を師とし。鬼谷子ハ縱横家なり。源黄老より出て。黄老と淮南とハ。老子の一書を說ひろめしるりのハ。文子と莊子

のみ。而して莊周ハ老聃の骨髓を攫て。孔子をそしりしも。又等閑なりしと。

その書ハ我ヲ說叙の篇ハ說客のごとく。莊子の意ハ。又盜跖

漁父の篇ハ。いと孔子を詰るゆゑに。後人の附增とす。東坡ハ。

そのよりを唱ヘる。莊子ハ舊五十三篇あり。郭象ハ注する。その疑しきを

りのを刪去て今ハ僅ニ二十六篇存せりといへ。もとも。說叙盜跖漁父

ハ。その渚篇なり。列子ハ莊子ハ先ハ。そるりのなり。鄭繆公ハ時ともるくとと

いへ。列子ハ上ハ。

呂覽。淮南子ハ。その諸道家又老子の皮肉を攫ヘる。呂不韋ハ秦の劇病

を攻。淮南ハ時を辨るハ。飾に諱忌の辭をりて。そのく老莊ハ本つくとと

ども。終ハ。その骨髓を得ず。故ニ言と行ひと齟齬して。或ハ奸邪ハ逞く。

或ハ反逆を謀る。呂不韋ハ藥を仰て死し。淮南王ハ誅せる。李斯と韓

非と。その師を共ニ。かくて韓非ハ李斯ハ殺され。李斯ハ又趙高ニ殺され

ぬ。剌剌ハ。て思ひ。ハ。悪と佐て國を亡し。人を殺して自を殺す。豈

誠ならんや。李斯ハ始皇ハ。ハ。て書を燔。儒を坑ハ。ハ。老子を。

ハ。ハ。ハ。老子ハ氏を愚ハ。自我ハ周ニ。ハ。ハ。書を燔。

儒を坑ハ。ハ。民を文盲ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

ハ。ハ。老子の本意ならんや。かるゆゑ。行もの。秦ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。道家

ハ。辨ハ。論ハ。ハ。儒教ハ論ハ。ハ。辨ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

書ふ仰て方ふ是ども。藥種を求めゞ已。是極めて人間ふ。行ハゞ行ハゞ
べ儒ふハ是と云用のみとハ。只草野の士ゝ。流て。愛情を斷。煩惱を
退け。面ゝ天窗の蠅を拂ふまでゝ。是を天下ふ布施をとも。人間ふハ用ひ
ゞ。ゝ。ゝろゝふ唐山殘國の時ゝ。雜說の士ハ。老莊ふ因て。刺刺ゝとゝ。
方士ハ又幻術をゝて人君を迷ゼ。狂ふ世俗。遂ふ老莊の本意を失ゝを
嘆ゝ。老莊の書ふ。西王母ふ乘ゝんといふゝをゝ。實ふ仙人ふ乘ハ。
雲ふ乘ゝゝりのとゝろゝるもあるゝ。鳥の飛行ゝゝハ翼ハ是ハ。
ゝゝれども雲の上ふ。ゝゝふとゝ。安ゝゝ人ふ翼ハ。是ハ。翼ふ。ゝけ是ゝ。飛
行ゝんとゝ。ゝゝるふ及べゝ。且雲ハ氣ゝ。ゝ。煙の如ハ。形ハ。ゝりのこれふ。ゝ
べゝろハ。その寓言ゝゝ。推てゝゝ。ゝゝふ周穆王。秦始皇漢武帝。
唐玄宗皇帝ゝんゝゝゝ。既ふ天子ゝれハ。老の行ふいゝらんとゝ。悲ゝ長

生して。歡樂をいつまでも極めんとゝふ大慾起り。不覺ふ黃老の說を信用して。
方士の爲ふ魅され。或ハ蓬萊ふ仙丹を求ゝ。或ハ西王母を恋ゝ。種ゝ
の阿房をつくされ。是ど黃帝以降。天子の仙人ゝるを原來嗜慾の
爲ふ。庶幾ふ仙藥ゝれば。命を縮め。國を滅し。妻子をゝて。世の胡慮を
送されゝゝろゝを隱逸ふ比べゝるりのゝで。仙藥を求め。山林を慕ハ
べゝ。世を金馬門ふ避るゝハ。東方朔もゝるふ。あゝ。ゝ。先生既ふ老莊
のゝゝねゝるゝを好ゝ。又ゝゝ。儒佛をゝゝえて。雜說を逞ゝ。物ふ逆ふゝと
りて。氣の葉ゝるゝゝハ。始皇漢武ゝ仙丹を求ゝゝ。灣ふ毒ゝ。後世ふ流
ゝゝゝゝふ似ゝ。世ふ老莊ハ學ゝべゝ。只老莊ハ行ひゝ。道家の說
を甘ゝゝりのゝ。ゝのゝ天窗の蜂を拂ハゝ。他の天窗の蜂を拂ゝゝゝる
ゝゝハその人ゝれを鞭ゝ。却ゝ是ゝ怨ゝ。既ふその言の用ひられ

ざるとまりのごら口と酸さるハ勇ン。まゝハ中是ど。逆ひてこゞゝら嘗れ
りのハ。ぬゝく逆ハどものゞ愚と去るのハ。究めて愚ゝるゝ。先生おゝさ
その一人ゝ。て惑ひてこゞゝら惜るのゞゝゝてその辨。百發百中せどと
いとも。童蒙ゝ孟ゝゞ。情ゝみそゝ才の情ゝゝる有ゝ生涯と老荘て
ゝゝされて世の狼狽のとりハゝゝ。と恥べきとゝそ。萬巻の書と読て。
萬里ゝ往還せんとハ丈夫の所ゝ是ども。遠く父母の國と去て。求て
危と求めハ君子のせざる所ゝゝ。そこの一條の論辨ハゝゝ先生の為ゝ
いゝのゝ。かゝる陳奮濠藉をゝ。ゝゝ。童蒙婦女子ゝ退屈さんハ。朕も
人情ゝ疎さゝゝ。ゝれハ。今ハ中。ゝの程ゝて口と閉ゞ。欽乎御の國王
ハ腐ゝゝて。ゝゝく。卑さ性質ゝのゝゝの為ゝ
ハ。是も又用の辨ゝ。現陳言ハ耳ゝ逆ひ良茶ハ口ゝ苦ゝ。岡目八目

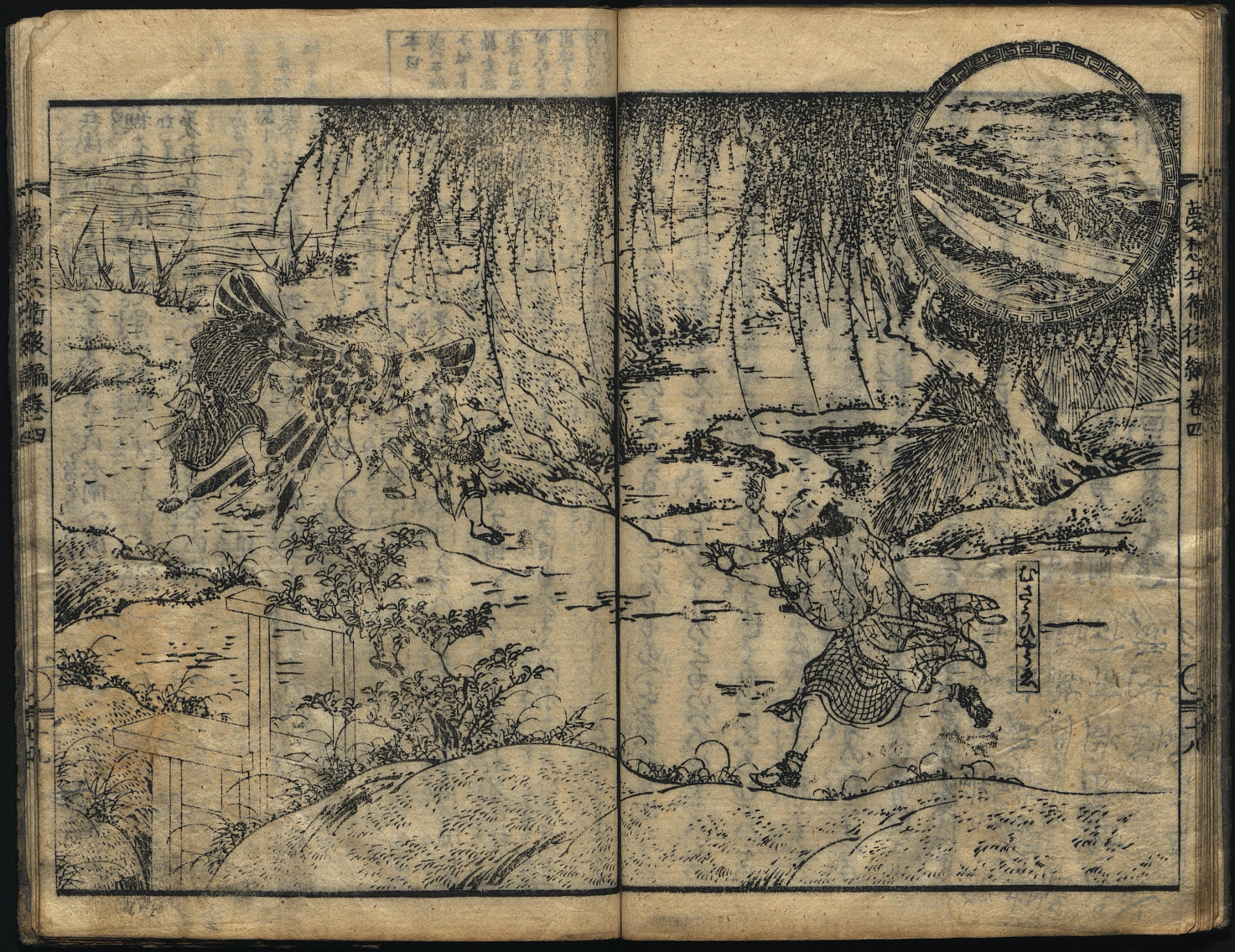
ゝれゝ。他の善悪ハゝるゝ是ど。ゝゝ吾悪のゝとゝざるゝ。七九の癸ゝ吳
ゝゝゝハ。ゝゝゝと。ゝる夏も。人ゝ何ゝゝゝゝゝゝ儒教と道家の鏡
の用捨ゝゝゝゝゝゝ

ゆく。何の友とハちゝざれど。班輸が雲梯。墨翟が飛鳶よ異をあらば。
翼を比べ必飛行ん。又降を乗ハの羽をおろし。彼ハてめ〻。虚空
ふ冲りゆこ。ちゝるふ一旦を怒國ゆく。件の紙鳶を失ひ。貪婪閻ゆて
ち是を獲ゝ。ちまゝしもあくぬよ。國王河〻と笑せのひ。物おのく
汎ゝろといふとも。又必失ふ時あゝ。加りその紙鳶らく飛行てこゝ
羽を翼をるゝ〻ともちゝでられよ乗るハ究めく危し。拄て水行ゝ歸り
ゆく。と叮嚀ふ仰ち是でも。姜太兵衛ハ。ゆ尾推辭て。從ひ乗べ既ゝ
鞦の國を往られど危しともひゆ〻ゞふ。今さら可惜紙鳶を捨て。舟ゆふ
んハ却危し。ちこのちゝふゆゝしめ〻〻。とちゝせゝべこのゝハニ絃よ往ちべ
とゝく。有司ふ仰て。姜太兵衛を客館ふ休足さゝて。是と歎待し。物鞦賜る
べきゝを。ゆえちとのふ。姜太兵衛ハ是とも固辭ゆて。ゆそ羽の暇を

乞既ふ罷り出んとするとゝ。てめそ仰ぎるふ。彼國王の面影ハよく浦嶋
仙人ふ似られ。ゆいふと疑ひ惑ひ原来ハこの飲乐郷ハ世ふいゝ蓬莱山
ふて飲乐王ハ別人ゆゝ。浦島翁の是を又教喩しゆふ。と推量
是ゞ。堂上堂下ふ諸司百官袖をつらねられ。剛ふゝゝ。ゆあの
官人ふ遠ゝ是て。王城を出ふけ是。舊の処ふ到ゝ。彼官人ふハゆゝ。
さる程ゝ姜太兵衛ハ飲乐王ふ教喩されて。ゆゝ〻悲愁し。國王の面
影ゆ。よく浦嶋ふ似ゝとゝ。ふ浅ゝ〻ゝ。死ゝ〻。ゆ公忽地矢のごく。
速ゝ日本へ立ゆらんとゝ。ひゝ〻べ。ちべくそゝ。とうち仰ぎて拒げども。紙鳶
ハ何処へ。ゆ知ゝ。ゆゝ。日ハゆ暮るゝ〻とゝ。ふ降ゝ。ふゝ。現ゆゝ。ゝ。ハ失ゝ
とゝ。ゆ。水行ゝ。送ゝ。ゝ。國王の宣ハ。ゆ。ゝ。ゝ。ゝ

ゆとりとねば。只彼天の羽衣を人ふとれば。毛女の昊るべし。彼此ふと。松の
横ふのを見をつけて。ゆくゆく田圃の間ふ生ふろ。そんまば。十家ばかりある男の
童がふさしていと天さるる紙老賢をうあんて。これはこゆりのるの。杏おのが先
ふんつけれどるくいたせよと。年ふをそれとゆくがおぢつるのくて。牡丹く
走り近づく犯ふ件の童子ホハ。五人ゆしに放さで。と年ひつ。紙者をさそり
とり裂くろ。夢想兵衛ハ吐嗟とだろ。一歩と十歩ふ飛ぶとく。その遠
ふいゆえて。ふまば。狡ふぐるゆあくぬこぶ紙者るまば面色蒼くるり。赤銅
るりて怒地怒まる声をあろ。汝ホいるまばこぶ紙者をかくいむぞへよう
裂くる。途ふ送ふるを拾ふどといハ。歓乗郷ふ仰げるえ亦るるこの賊奴
と罵まば。童子ホまろて冷笑ひ。ところ以ぬとといふ吳國人うる。吾倅い
で。送ふるりのを拾ふべき。ふまハ天ふ降ふる。天天のふるを取ふざまば。

知禍ありといろ。異國人のまるとるふばといハ。ものあくど。義兵衛ハ
ふとと腹ふて甘蔗吉瑞るんどろ。天のふるりのとものいめ。紙者るハ人の
他まるりのふて。天ふ自我と降ふるふ。ふ口ふ。ものいひろむ。ハ。その
賊公顕然ふろ。舊のどくふて返せ。くせ。といたはけば。童子ホ発く気色
るのくどぶ國の小児ホハ組豆を陳礼容を設け。灑掃疫対を身の勤ふ。
習学問ふ暇るく。父兄ふ事るを。乗とるるまふ紙者とやらいりのハ。
るり。学盃の弄物を弄びて乗とるりのは。ふまハどぶ國ふるたりのれば送
せ人のるたを去まるりてどぶ田の畦ふけて。ものどふせんと云ひのをん身
その主るりと宜ふを惜ふて返ぶといふハるふ。ん身賊公あるまふ人を
倫児といふ。ゆらん。ふるぶ。と罵くと。國風るまばふとるびて義理イ
怜悧く恥めどくりてあれば。回答るまど。暇を隔て投ふと敗紙者を。義兵


夢想兵衛後編卷四
夢想兵衛後編卷四

兵衛ハ忙く受て上ると云ふ間もなく水閘へ落せうぶ紙書ハ忽地ふ濡れて糊たるん紙破れて骨ハ水底へ沈みけれバ堪忍の二字を説て人を諭せ爰ハ兵衛も多ふハ異ならぬ為ハ金の綱と憑まる紙書を破られるのみならず取をもなめ失ひ引ハ進退こゝに究りて揺り固め左ろ巻上共ふ怒りを揮起り立かつて前ふ立る童子の頭を打んとすゞ打たゞ〜るとゞ〜ふつ足ゞ矛を跌して水閘へ逆さまふおちゝ入て沈ふ折ふ打砕れ一声苦と叫びもあへぬ間堰の中ふ死ると見ハ云ふ南柯の一夢ふて愕然ゝとしてもどろ見覚ゝ全身ゝ冷汗ふのれ神奈川の本国の漁舟の中ふ目ゝるゞ夢のごとして枕ふもたる楫をちゝふ〜ふ〜ふ身を起つ。よゝゞ汗を拭ひ考ゝ遥ふ西を見ゝ見ゞその日もいまゞ没果ゞ身ハ半日の丹ふ興ゝて更ふ数年を経るが如し不思議といふもあまりあるべゝ〜とも人

本目
或ハ本数
ふ似ふ
藤金志
ふ本目ふ
似るかる
出津ゝ
ゆゝうの
目あゝ

ゞバ
本目と
いふふ牛
馬の故
ゆゝ

列子巻
三周穆
王篇第
十一張

ふ。見れかゝしゝ〜ゝ勲ふ諸子百家の書を読とゝも只雑学ふのゝ上をとゞめて遂ふ聖人の大道を極めゝゞ只管ふ辯説を好めば狂ふ厭ゝ上の背さて。地上の風波を逐ふとて不覚ふ妄想を発せうぶ。爰ふ紙老幼ふ学て名とゞふ中ゝうね国を拵ゝ。その風俗と舌戦ゝ好ひふ身を殺せる。貴ハゞれと誓め人と教るふ足ゝぬゞ。ゞまと云ゞて可ゝんやふ爰ゝうぶゞて可ゝんやゞひ出せゝのゝそあれ。むゝ唐山鄭国ふ野ふ狩を取ゝるのゝ。殘ゝを走る鹿を逐て爰ゝて〜ゞまゝと鄭ゝゝ人のゝんとをおそれて遽て隍の中ふ落ゝ。狩を上ふ覆ひつ。尊ゞ上限ゝゝ。かゝて又狩をとるふ俄ふて。その義ゝを弗と送ゞふけり。疑ひ惑ふて遂ふ亦ゝゞまを爰ゝゝと思ひうぶ。只ゝゞまとゞひゝゝ云て主ゝるふ側ふゞまを咬ゝのめゝ。その言ふ因て義ゝる鹿を索てこれを取ぬさて家ふゝりてゝそ室人ふゝゝ。向ふ狩ゝるゝのゝが鹿を捕ゝる

愛とえて。その外を忘れ。とのたまふ。彼が愛の真愛なり。といへばその室人周根をうせ。それ汝が愛ゆえ樵夫が康を愛せ。と見ゆるのみ。なるが樵夫が妻ゆへ。汝が妻を愛とのたまふ。既に鹿ゆふ扶が彼が愛。愛扶夫を愛をもざるか。かくて苟もの者は鹿を失ひつるを忘れ。その夜の愛ふ鹿を義。ふる外と彼康を取る主をもざくとえさしらず。爽旦愛を隨ふ鹿を取ふ其人を索ゆえ。を公て争ひ。時ふ五箇の禁法を学る士師とゆふ官人。を。をとりていはく。汝をゆ。康を殺ふ。ふるふ妻ふ。愛とあり。かくて又ふ愛ふて康を取る人を知て妻ふ。を実と謂へり。彼は真ふ汝が鹿を取て汝と康を争ひ。彼が室人は又愛ふ鹿を失ひ人を見て人の鹿を殺ふ。一四ゆ。とのこゆ。かくて今ふ鹿ゆふ。

疑諭。ふ。その証を鄭君ふ。愛ゆ。鄭君ゆ。ひて。喜士師ゆ復愛ふ。人の鹿を殺ゆ。ゆ。ふ。ゆ。ん。と疑ひ惑ひて。を大臣ふ問ゆ。大臣答て。愛ゆ。と愛ゆ。ゆ。ふ臣を。を年。を愛を学ふ。ゆ。黄帝と孔子の。を。を。ふ。ゆ。ふ。ゆ。ふ。ゆ

ゑ。生物を殺ゼ。又碎ざるものを殺ゼ。ゆゑに生物を食ゼ。碎ざるものを食ゼ。餓るとも死忍地より人を食んとする。殺るとも夫虎ハ人と異類ふ。養ふものを嫌るハ順なり。あゝ是を教ふハ逆也。今これを由ふ。思賢の賢才ふ減服するハ順也。故ふその非を攻るハ逆なり。昔古人の金言を切ぬ死ゼ。つゝまを喻し。養虎の法を做ハゞ。これ又竟を食ゼるん誠を人を尽ゼとも。順逆の理をまゝざれば危し。そもかゝる三誡の法を守りて情ゼ。言なりとまゝく曙ゝ直と舟を漕ゝ。次の日より草紙を綴り起して。義ゝる國くの形勢ハさゝるの。自他の論辨をまちもるく編次て九巻ゼ。胡蝶物語と号ゝるゞ。ゝ抗の友とするの。人ふハ絶てゝるとを許さゞ。かくて又ゝ。ゝ胡蝶物語ハ荒唐ふしてその辞ゞといゝ俗ゝ。是を君子ゝ呈ゞ。ゝ卑しゝて閲ゝゞ。又世俗ゝ呈ゞ。人情ゝ情ゝ。

是を又取べゝ。されバとく又是を。女子童蒙ゝ呈ゞ難解ゝく巻を掩ゝ。ゝ夫君子の為ふ取れゞ又世俗ふ厭ゝて女子童蒙ゝ捨られるゞ。実ゝこれを角の矢ゝ。旦これを情ふ忘ゝふまゞ。これ彼宋の陽里ふる。華子が忘ゝふ做んふゝゞゝ。ゝ草紙を裂捨て世ゝ伸ゞとひとゝごち。穢ゝ敗麁の底を捜るふ件の草紙ハゝ。ゝ。ふ怪ゝるゞゝ。これを。ゝ忘ゝまんとゝふゝゞゝ。ゝ。ゝ。

○總評

聖賢の遺書をえて。ふくその語を喜といへども。いまだその道をきわめざるものは。遂に殃を惹こと尋ぬるがごとし。齊の國氏といふものありて大なる家富さかえ又宋國の向氏といふものありてその家究て多しかるに。ようやくにして齊の田氏をその術を請求めしかば田氏これを告ていはく。これはよく盗をするのみ。なぜゆえに盗をしるか。一年あるいは口を餬するに。二年あるいは物をしるべし。三年あるいは貯あるべしとこれを教へ。向氏受てふたたび喜びその盗をなる言を喩てその盗をなる道を喩らせ。やがて夜間に垣を踰室を鑿目のえるかぎりの財を探ざるこれ盗ぞ事頭は賊に似るの罪をいとうされば。その罪を購ん爲に先祖相伝の田園居宅をさへ失ひ。ようやくにして齊

あ必死にいたる國氏を怨しかの國氏はかの話を聞て嘆息。あん身が盗をしるこそ。その道よりしかるべきのみ至るべしこれ今審にこれを告ん。天は財あり。地は利あり。これ盗をなるこれは世の賊ともいふべし。これ禾を殖てこれを鬻。又獣を獵又魚を取てこれを鬻かくのごとく家富さかえ。これ天地所産の涸澤を盗と又山沢の産育を盗と竹木を伐て塀を築室を建陸の禽獣を盗と水の魚を盗とこれ有とまるる上。抑盗はあらざるべし何ぞや。夫禾苗竹木禽獣魚鼈いづれか天の産る所あらざるこれ有あらざるこれ有とまる有よこれを盗むといいひしかるべし造化の功を盗むと。公道のいはゆる。亦禾穀金銭珠玉衣裳雑具に至て人これを作て人又これを聚むこれとる人作のものあらざる天のあるものあらざるものあらざるものあらざ

を盗んとおもひしゆゑ。生地より罪を犯すべからず。かくて人孰か怨んやといふべ
きをいふべし。理義は自我の理義なれば聖人の私なり。似り設るなれば
その理義ふるくて理義を説。是も又自我の理なり。既に自我の理義
を盗みて己が有とす。遂に童蒙を喻さんとおもへば寓言といへども紛れ
て罪なきを推て知べし。爵禄富貴は人能比て天の為るものなれば
賊臣粉ひ難くして位を簒ひ。佞佞なれて富を盗みこれを己が有と
なるなれば。その罪の脱れがたきと。拒ん難ぎるものあらん。個人作
人巧を盗みて。こゝろふかくその罪を忘ざるものあり。病愈て医師に
革礼せざるもの。人に物学びて酬謝の礼なきもの。古歌新句を盗て。
己が作となるもの。人に憑りて己が有となるもの。人の詩文章書画を
奪ひ去るもの。古人の偽書を利を射るもの。これ皆天の与ふるなれば。

或は人情に拠り或は公道に似るふりして。竟に曠ざるのこれを罪な
といふとも。天の盛る花を盗みて己が有のごとく罪なきなれば
そが中に小説を似るものは。盗と又異なり。古今興敗聖王賢臣義士孝
女烈女の事迹。鬼神老仏の聖蹟古語舊説悉皆これを盗て己が有
とす。尋ねはこれを夢に托せ。既にこの書に述る所。亦是夢なりといふ。今人
己が批評するも夢なり。その夢を夢として覚るものも又夢なり。人我一
切夢なりとて。その夢を夢として面前に夢を説く。癡なる
なり。癡なるなり。実に是夢なるべし。これ豈夢を盗んや。その盗るとも盗
ざるとも夢なるとも夢なるべからざるとも。覚るものこれを辨じ覚るこ
とのこれをしらん。

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之四　大尾

予自髫歲愛讀書而善記爲及壯年耽著作而皆忘爲今知之矣我識也非我性我忘也非我心習而記爲勞而忘爲耳人毛髮皆黑而後白人眼目皆明而後翳人齒牙皆鋭而後脫人心神皆精而後倦設夫觀變化於一身則老幼終始以爲我有順一化之自虛則識與忘豈我心耶一形之開闔一性之往來莊周嘗以蝶夢喻之故曰萬物同根是非一氣奚物而爲周奚物

而爲蝶認周以爲非蝶是未能忘我也孰蝶以爲非周是未能忘物也必有大覺而後知大夢必有真人而後有真知是故華子病忘而魯儒治之顏淵坐忘而仲尼知之夫苦而識之者未足稱識也勞而忘之者未足稱忘也一强一犯竊竊然而私之妄也心非我有而作是書者心耳名非我名而命是書者名耳有予無予我未能辨焉於是予忘有無庚午仲秋望馬琴再識

東都 曲亭馬琴 著作

一柳齋豊廣画

全本前後九冊
文化庚午發市

平藏
林梓

和漢
西洋 書籍賣捌處

群玉堂河内屋 岡田茂兵衛

大阪心齋橋博勞町角